様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月 １４ 日現在

機関番号：３３９１２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2021
課題番号：１７Ｋ０２５０３

研究課題名（和文）ヴィクトリア朝の「堕ちた女」の研究：その実態と文学表象について

研究課題名（英文）A Study of Victorian "Fallen Women" : Their Lives and Representations in Literature

研究代表者
西村　美保（Miho, Nishimura）

名古屋学院大学・外国語学部・教授

研究者番号：６０２８４４５２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、歴史的資料の精査、現地調査、そして文学及び絵画表象の吟味、日英比較を行った。性的逸脱に至った女性は「堕ちた女」とみなされたが、その背景には貧困や孤独、そして教育の欠如がある。その実態は、当時の小説に反映され、作家たちは理想と現実の間の葛藤を描き、挑戦の姿勢を見せている。国内での救済は難しく、植民地へ移住させることが現実的な解決策だった。絵画表象の吟味も行い、社会問題が絵画を通していかに世に訴えられたかを確認した。日本の状況は類似点も多いが、興味深いことに「救済する論理」が対照的である。

研究成果の学術的意義や社会的意義
学術的意義及び社会的意義は以下のとおりである。一つには、今回のテーマは貧困、ジェンダー、飲酒問題、差別、救済といった普遍的な社会問題と絡んでおり、その実態と表象を比較考察したことで、問題の深刻さをあぶりだした。二つ目として、いかに当時の芸術家たちがこうした問題に取り組んだかに光を当てたことである。最後に、複数の学問領域に渡る、影響力を持つ研究手法と内容を挙げたい。文学だけでなく絵画表象も分析し、フィールドワークと社会福祉の観点からの日英比較も行ったので、波及効果が期待できる。

研究成果の概要（英文）：In Victorian society, women who had sexual and social transgressions were regarded as “fallen women”. The main factors are poverty, solitude, and lack of education. Whereas the world’s severe attitude toward them is reflected in the novels of the age, authors show defiant attitudes toward the world by describing conflicts between ideal ways of rescuing them and various obstacles. Domestic solutions were so difficult that the actual solution was to emigrate to colonies in many cases. Research trips to workhouse museums in Britain (2018) helped us to deepen our understanding of the lives there. Through examining representations of “fallen women” and workhouses in Victorian paintings, we could understand how social problems were presented through paintings as well as novels in those days. Finally, as for the Japanese situation in the same age, there are many things similar to the British situation, though the logic to save “fallen women” in each country is quite different.

研究分野：ヴィクトリア朝文化・文学

キーワード：ヴィクトリア朝文化　女性労働者　ジェンダー　貧困　飲酒問題　ヴィクトリア朝小説　社会福祉　救貧院

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

ヴィクトリア朝の「堕ちた女」に焦点を当てた研究は、George Watt や Tom Winnifrith によるものなど、1980 年代以降少しずつ目にするようにはなったが、まだ国内・外とも研究の歴史が浅く、質と量の両面で十分とは言いがたい

申請者は「狙われた女たち―女中の依存と誘惑をめぐる文化的コンテクスト」（『「依存」する英米文学―阪大英文学叢書 5―』((2010)) ）において、女性使用人が支配階級の男性から性的搾取を受けやすかった事実とその理由を明らかにし、サミュエル・リチャードソンの *Pamela; or, Virtue Rewarded*（『パメラ：報いられた美徳』(1740))とトマス・ハーディの *Tess of the d'Urbervilles*（『ダーバヴィル家のテス』(1891)）を比較考察した。しかしながら、堕落の危険性をはらんでいたのは、女性使用人だけでなく、お針子をはじめとするその他大勢の女性労働者も同様であったので、多様な職業の女性に焦点を当てる必要性を感じた。本研究では女性貧困層全体に目をくばり、ヴィクトリア朝社会のモラルとその逸脱者に対する対応、困窮した女性たちがたどり着いた救貧院やその他の施設、救済と慈善の在り方等について調査する。ヴィクトリア朝**前期**の作品としてエリザベス・ギャスケルの小説を、**後期**の作品としてトマス・ハーディの小説と詩を主に分析し、出版年と作品の設定舞台、作家のジェンダーによる「堕ちた女」の表象の差異を横断的に吟味する。

２．研究の目的

研究の目的は主に以下のことを明らかにすることである。

(1) 救貧院など貧困層を収容した施設の実態とそれらの施設に対する社会の反応

(2) エリザベス・ギャスケルやトマス・ハーディの小説を中心としてヴィクトリア朝小説における「堕ちた女」の表象

(3) ヴィクトリア朝絵画に見る「堕ちた女」の表象

(4) 「醜業婦」への社会のまなざしと救済をめぐる日英比較

３．研究の方法

代表者（西村）は「堕ちた女」をめぐる文化的コンテクストの構築とディケンズ、ギャスケル、ハーディといったヴィクトリア朝作家の小説における表象を横断的に吟味すること、さらにはラファエロ前派の絵画やその他ヴィクトリア朝絵画における「堕ちた女」や救貧院の表象も吟味した。分担者（濱）は植民地のことを視野に入れつつ、ギャスケルやジョージ・エリオットの小説における表象研究を、分担者（松倉）は社会福祉学の観点から研究テーマに関連した日英比較を行った。ヴィクトリア朝の「堕ちた女」の実態を把握するために、女性貧困層の生活、彼女たちを収容した救貧院関連資料を収集し、分析をした。「堕ちた女」を収容したマグダレン・ハウスの関連資料も収集を試みたが、確認できたのは、18 世紀にキリスト教の牧師によって、その設立の重要性を説いた資料の存在であり、18 世紀にすでに救済の重要性が認識され、博愛主義者たちが動いていたことが確認できた。2018 年にはフィールドワークとして連合王国における孤児院や救貧院のミュージアムを訪問し、設備や実態を研究調査した。基本的には各自で研究を遂行しつつ、年 1－2 回研究会を開催し、進捗状況を報告し合った。

４．研究成果

エリザベス・ギャスケルの『ルース』を含むいくつかの作品は、ヴィクトリア朝社会においてどのような女性が「堕ちた女」とみなされ、社会においてどのような扱いを受けたのかを鮮明に物語っている。特に、ギャスケルの場合、作品外（＝実生活）では売春婦に身を堕とした女性を助ける活動をし、彼女たちを英国国外に送り出すことを解決策として支持していたのに対して、作品内では同様の解決策を支持せず、むしろ売春婦の問題を個人の問題ではなく社会全体の問題として捉えている点に大きな発見があった。代表者（西村）は『ルース』について、様々な角度から考察した。脇役ではあるが重要な役割を果たす「善良な女」で女性使用人サリーに着目して、主人公ルースとの表象の差異を分析し、他のヴィクトリア朝小説における女性労働者たちの表象と比較考察をした。救貧院など収容施設に関する資料の精査を行う一方で、文学表象と視覚表象の両方を「堕ちた女」と「救貧院」について吟味した。それにより、当時の作家や画家が社会問題に対して敏感で、作品を通して世間に強く訴えていたことが確認できた。今後は「堕ちた女」を救済しようとする 18 世紀の一連の

動きを詳しく精査し、18 世紀から 19 世紀へと続く、文学者を含む博愛主義者の活動について調査し、掘り下げていきたいと考えている。分担者（濱）は『メアリー・バートン』とその他のギャスケルの作品（主に中・短編）の精読を行ったほか、ギャスケルとほぼ同世代の女性キャロライン・チザム（1808-1877）という慈善活動家について調べた。彼女はイングランドからオーストラリアに移り住み、そこで女性移民たちの救済に当たっていた。ギャスケルとチザムの直接的な接点や、現在もその活動で高く評価されるチザムの功績を確認するため、オーストラリアでの現地調査を予定していたが、コロナの感染拡大もあり、渡豪することができなかったので、それらは今後の課題である。分担者松倉は、ヴィクトリア朝の「堕ちた女」の社会的背景とその表象について、近代日本との比較において社会福祉の文脈から検討することに取り組んだ。ハーディの『ダーバヴィル家のテス』など、「転落」する女性の表象や物語が説く道徳観は、当時の知識層や指導者層に影響を与えたと思われる。そのような視点に立ち、「淪落」「堕落」「転落」という意識が萌芽する明治～大正期の関連文献や進歩的な指導者たちの言説を整理・分析したところ、日・英において「堕ちた女」に向けられる「社会的なまなざし」には共通点があるが、「救済する論理」は対照的であるとの考察結果を得た。今後は、「救済する論理」の相違について考察することで、「堕ちた女」という存在、またその表象が、当時の英国や日本の社会統制においてどのような役割を担っていたのかを明らかにしたいと考えている。

2017 年度はギャスケルの作品を精読する一方で、関連資料収集をして、研究会で進捗状況を報告し、2018 年度の出張に向けた準備を行った。海外出張については、二手に分かれ、いくつかの施設を回り、施設内部の見学や当時の生活をうかがわせる衣類、生活道具、規則などを直接学んだ。代表者（西村）はフィンランド国立図書館にて関連資料として当時の女性労働者に関する研究書を吟味し、その後連合王国ではノッティンガム近郊の救貧院のミュージアム"The Workhouse, Southwell "を訪問して、当時の貧民の隔離状況と救貧院の実態把握に努めた。当時の小説で「堕ちた女」となった者が最後にたどり着く場所として描かれる救貧 院に出向き、実態を把握できたことは大変意義深かった。レスター大学では特に「堕ちた女」たちの移住に関する文献を吟味した。分担者（松倉・濱）と上記大学で落ち合い、ジョアンナ・シャトック教授と研究について話をする機会を得て有意義な時間を過ごした。松倉と濱は Foundling Museum（元捨て子養育院や Ripon にある Workhouse Museum（救貧 院）、世界最古の救貧院 Hospital of St. Cross などを訪問した。その後、視覚表象の研究の一環として、オーストリアのウィーンの美術史美術館へ赴き、「堕ちた女」あるいは性的誘惑に関する絵画的イメージを考察した。

2019 年度、代表者（西村）は、『ルース』、トマス・ハーディの『ダーバヴィル家のテス』、『カスターブリッジの市長』、そしてダイナ・マロック・クレイクの『女主人とメイド』を取り上げ、母子関係、女性の友情、相互扶助といった観点から作品を分析して、共著ではあるが、第一執筆者として論文執筆を行った。「堕ちた女」や経済的に困窮した女性と手を差し出す女性の関係性を探求したことで、研究に広がりが出た。また、ハー ディと女性作家との間に見受けられるテーマの扱い方の差異にも踏み込んだ議論をしている。分担者濱はエリザベス・ギャスケル協会（第 31 回例会）において、ギャスケル作品に登場する三人の「堕ちた女」に注目し、その描かれ方の変遷について報告した。実生活でギャスケルは 16 歳の「堕ちた女」を救済の目的で国外に移住させたが、作品内では国外移住を解決策として利用することがなかった。発表では、*Mary Barton*（1848）、“Lizzie Leigh”（1850）、 *Ruth*（1853）に登場する「堕ちた女」たちに注目し、ギャスケルが堕落の原因を個人の問題から社会全体の問題へと捉え直していく過程を読み取った。分担者（松倉）はハーディ等の作品を読みながら、現地調査で訪れた貧困地区や救済施設についての整理および、英国において受け継がれてきた救済の言説に関する社会福祉史の立場からの考察を進めた。その一方で、日本における救済に関しても、近代から現代にかけての「救済 へのまなざし」の変化を相対的にとらえるため、最近の社会福祉専門職養成教育や福祉サービス現場において求められる「基盤的価値」および「人間観」についての実態を調査した。こうした作業の経過と考察の一部を学会において報告した。

2020 年度はオーストラリアの救貧院を周り、現地調査・資料収集をする計画だったが、自然災害の影響や、何よりコロナウィルスの感染拡大のため断念した。 分担者濱は国内においてオーストラリアの救貧院や Caroline Chisholm（1808-77）の功績などについて情報を得た。その救貧院はイングランドからの移民を救済することを目的としている点、また生活費を稼ぐ手段として売春業に走りがちだった女性や、子どもを持つ母親たちに教育を施す点 において特徴的である。女性を単に「救われる存在」と位置づけるのではなく、イングランドの植民地政策や国家形成に貢献する要因として機能させようとした点は、ギャスケルやハーディの作品に描かれる「堕ちた女」との大きな違いである。代表者（西村）は主に Jennie Barchelor and Megan Hiatt (ed.) *The Histories of Some of the Penitents in the Magdalen-House, as Supposed to be related by Themselves* (1760) (London: Pickering & Chatto, 2007)を精読し、第一回研究会において報告し、女性の救済を訴える博愛主義的な

視点がすでに 18 世紀に見られることを確認した。上記作品はマグダレン・ハウス収容者が物語った形式をとる物語であるが、匿名で序文を書いた作家がおり、作家と博愛主義者との関係性を吟味することの重要性を感じた。分担者（松倉）は日英の比較において「堕ちた女」に向けられる社会的なまなざしには共通点がみられる一方で、「救う女」たちが掲げた論理は対照的であるとの考察結果を上記研究会において報告した。また、「堕ちた女」や「孤児」を中心とした救貧事業に関する年表をまとめる作業に取り組んだ。

2021 年度は代表者(西村)はヴィクトリア朝社会において「堕ちた女」とみなされた女性や救貧院に関する絵画など、視覚表象を吟味した。社会問題を扱うことで有名 な『グラフィック』誌に掲載されたフーボルト・フォン・ヘルコマーの版画と、絵画"Eventide: A Scene in the Westminster Union"、それらの批評を吟味し、 研究会で発表した。改めて絵画が社会問題を物語るのにいかに重要な役割を果たしたかを強く認識させられた。上記絵画は救貧院内での作業の様子や同じユニ フォームの疲れた高齢女性たちの働く姿がモノトーンで描かれている。ヘルコマー自身ロンドンのソーホー地区にあった"the Saint James' Workhouse"へ訪問 したことがあり、その経験に基づいている。絵画の方は版画を多少脚色しているがわびしい雰囲気は共通している。身を寄せ合いほら穴のような場所に集められていて、社会的に軽視された存在であることが強調されている。一方で、零落した女性たちが置かれた家庭環境の小説における描写を吟味し、その結果、貧困だけでなく、家族の飲酒問題も浮かび上がった。それで改めて、その社会的背景、社会の飲酒に対する規制と個人の行動についても研究を進め、トマス・ハーディ の小説における飲酒の表象と文化的コンテクストについて日本トマス・ハーディ協会で口頭発表した。分担者（濱）は、オーストラリアへ行った売春婦に関する 論文精読に従事し、また分担者（松倉）は収集した文献や挿絵、現地訪問時に得られた史料をもとに、新救貧法下での下層の人々の生活実態（「最悪の」仕事、居住地 域、衛生、救貧院や貧民学校での処遇など）について整理したものの一部を、研究会において報告した。並行して、「堕ちた女」の社会的背景とその表象について社会福祉史の立場から考察した。

2017 年度

口頭発表
１．松倉真理子、「『堕ちた女』たちの実態と表象—二重の他者が問う救済の当事者性」日本社会福祉学会第 65 回大会、首都大学東京、2017 年

2018 年度

口頭発表
１．西村 美保、「『ルース』における女性労働者の表象をめぐって—『堕ちた女』と『善良な女』—」ギャスケル協会例会、岡山国際交流センター、2018 年

２．西村 美保、「エリザベス・ギャスケル『ルース』に見る女性労働者の表象と文化的コンテクスト—お針子 vs 女性使用人—」アメリカ服飾社会史研究会、2018 年

３．松倉真理子、「近代イギリス、下層の人々が生きた場所を訪ねて～ 社会福祉ツーリズムの可能性～」日本福祉文化学会第 29 回全国大会。2018 年

４．松倉真理子、「ガントレット恒子著述目録とその検討～『婦人新報』記事を中心に～」日本社会福祉学会九州地域部会第 59 回研究大会、2018 年」

著書
１． 足立万寿子、芦澤久江、西村 美保、猪熊恵子、齋木愛子、Tatsuhiro OHNO、江澤美月、鈴木美津子、松岡光治、西垣佐理、石井明日香、木村正子、松浦愛子、太田裕子、木村晶子、鈴江璋子、石塚裕子、大前義幸、Bonny LIU、宇田朋子、『創立 30 周年記念「比較」で照らすギャスケル文学』（第 3 章『ルース』における家事使用人サリーの表象—「堕ちた女」と「善良な女」の対比を通して—）pp.37-48.）日本ギャスケル協会編、大阪教育図書、2018 年

2019 年度

口頭発表
１．濱 奈々恵、「成功の場、堕落の場、救済の場—George Eliot 作品との比較でみる「外の世界」」日本ギャスケル協会（第 31 回例会）2019 年

２．濱 奈々恵、“Returning Home with a Fortune: Imperial Declines and Births of Cosmopolitans in George Eliot’s Later Works” George Eliot 2019: An International Bicentenary Conference（国際学会）

３．松倉真理子、「2000 年代以降の社会福祉専門職養成における基盤的価値についての考察～F 大学「実習報告書」の分析をとおして～」日本社会福祉学会九州地域部会第 60 回研究大会

論文
１．西村美保・亀井由紀子、「ヴィクトリア朝小説に見る母子関係、女性の友情と相互扶助――困窮する女性に対する理解――」『名古屋学院大学研究年報』32、pp.1-17、2019 年

２．西村美保・小島弘、「ヴィクトリア朝小説における飲酒の表象」『名古屋学院大学論集 人文・自然科学篇』56-2、pp.21-34、2020 年

３． 濱 奈々恵、“Adaptations of ‘Inkle and Yarico’ and Shattered Colonial Illusions in ‘Brother Jacob,’ *Felix Holt, the Radical* and *Daniel Deronda*”、*George Eliot Review* (Special Issue) 21、pp.51-72.

著書
１．池園宏・池田祐子・岩下いずみ・鵜飼信光・金子幸男・柴田千秋・高本孝子・原田寛子・濱 奈々恵、『英語圏小説と老い』、開文社出版、2020 年

報告
１．濱 奈々恵、「何を書くか、どう書くか：Andrea Levy の Every Light in the House Burnin' と Fruit of the Lemon」福大論叢（研究チーム報告論文）19, No. 2, pp.67-74.

2020 年度

著書
１．エイザ・ブリッグズ、玉井暲・ 米本弘一・ 新野緑 ・正木みき・ 服部慶子・ 西村美保 ・鴨川啓信・ 伊勢芳夫訳、『ヴィクトリア朝のもの』国文社 2020 年

2021 年度

口頭発表
西村美保、「ヴィクトリア朝の飲酒をめぐる文化的コンテクスト—ハーディ小説における飲酒の表象—」、日本ハーディ協会、2021 年

著書
１.」玉井暲 西村美保 三宅律子 前原澄子 太田ちひろ 斎藤衛 田中梨恵 野間由梨花 米本弘一 八木 美奈子 清水緑 川島彩那 森元奈菜 佐藤牧子 中村由佳 山口良子 岩本朱未 福本菜々美 片山愛 梨 橋本安央 松原陽子 ボイキン舞 山本秀行 冨永英夫 梅原大輔 ナサニエル・ルドルフ、『武庫川学院創立８０周年記念論文集 魅力ある英語英米文学 ――その多様な豊饒性を探して――』（「女性労働者の性的逸脱と救済をめぐる文化的コンテクスト―『ルース』における「堕ちた女」と「善良な女」の表象―」pp.165-178.）大阪教育図書、2022 年

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 濱　奈々恵	４．巻 21
２．論文標題 「Adaptations of “Inkle and Yarico” and Shattered Colonial Illusions in “Brother Jacob,” Felix Holt, the Radical and Daniel Deronda」	５．発行年 2019年
３．雑誌名 George Eliot Review (Special Issue)	６．最初と最後の頁 51-72
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 濱　奈々恵	４．巻 19, No. 2
２．論文標題 「何を書くか、どう書くか：Andrea Levy のEvery Light in the House Burnin' と Fruit of the Lemon」	５．発行年 2019年
３．雑誌名 福大論叢（研究チーム報告論文）	６．最初と最後の頁 67-74
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 西村美保・亀井由紀子	４．巻 32
２．論文標題 ヴィクトリア朝小説に見る母子関係、女性の友情と相互扶助――困窮する女性に対する理解――	５．発行年 2019年
３．雑誌名 名古屋学院大学研究年報	６．最初と最後の頁 1-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 西村美保・小島弘暉	４．巻 56-2
２．論文標題 ヴィクトリア朝小説における飲酒の表象	５．発行年 2020年
３．雑誌名 名古屋学院大学論集　人文・自然科学篇	６．最初と最後の頁 21-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計8件（うち招待講演　1件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 濱　奈々恵
２．発表標題 「成功の場、堕落の場、救済の場―George Eliot 作品との比較でみる「外の世界」」
３．学会等名 日本ギャスケル協会（第31回例会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 松倉真理子
２．発表標題 「2000年代以降の社会福祉専門職養成における基盤的価値についての考察～F大学「実習報告書」の分析をとおして～」
３．学会等名 日本社会福祉学会九州地域部会第60回研究大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 濱　奈々恵
２．発表標題 “Returning Home with a Fortune: Imperial Declines and Births of Cosmopolitans in George Eliot’s Later Works”
３．学会等名 George Eliot 2019: An International Bicentenary Conference（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 松倉真理子
２．発表標題 近代イギリス、下層の人々が生きた場所を訪ねて～ 社会福祉ツーリズムの可能性～
３．学会等名 日本福祉文化学会第29回全国大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 松倉真理子
２．発表標題 ガントレット恒子著述目録とその検討～『婦人新報』記事を中心に～
３．学会等名 日本社会福祉学会九州地域部会第59回研究大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 西村美保
２．発表標題 エリザベス・ギャスケル『ルース』に見る女性労働者の表象と文化的コンテクスト―お針子vs女性使用人―
３．学会等名 アメリカ服飾社会史研究会
４．発表年 2019年

１．発表者名 松倉真理子
２．発表標題 「堕ちた女」たちの実態と表象―二重の他者が問う救済の当事者性―
３．学会等名 日本社会福祉学会第65回大会、首都大学東京
４．発表年 2017年

１．発表者名 西村　美保
２．発表標題 『ルース』における女性労働者の表象をめぐって―「堕ちた女」と「善良な女」―
３．学会等名 ギャスケル協会例会、岡山国際交流センター
４．発表年 2018年

〔図書〕　計5件

1．著者名 エイザ・ブリッグズ、玉井暲　米本弘一　新野緑　正木みき　服部慶子　西村美保　鴨川啓信　伊勢芳夫訳	4．発行年 2020年
2．出版社 国文社	5．総ページ数 517
3．書名 『ヴィクトリア朝のもの』	

1．著者名 玉井暲　西村美保　三宅律子　前原澄子　太田ちひろ　斎藤衛　田中梨恵　野間由梨花　米本弘一　八木美奈子　清水緑　川島彩那　森元奈菜　佐藤牧子　中村由佳　山口良子　岩本朱未　福本菜々美　片山愛梨　橋本安央　松原陽子　ボイキン舞　　山本秀行　冨永英夫　梅原大輔　　ナサニエル・ルドルフ	4．発行年 2021年
2．出版社 大阪教育図書	5．総ページ数 ―
3．書名 『武庫川学院創立８０周年記念論文集　魅力ある英語英米文学　――その多様な豊饒性を探して――』	

1．著者名 池園宏・池田祐子・岩下いずみ・鵜飼信光・金子幸男・柴田千秋・高本孝子・原田寛子・濱　奈々恵	4．発行年 2020年
2．出版社 開文社出版	5．総ページ数 330
3．書名 英語圏小説と老い	

1．著者名 足立万寿子、芦澤久江、西村美保、猪熊恵、Tatsuhiro OHNO、松岡光治他15名	4．発行年 2018年
2．出版社 大阪教育図書	5．総ページ数 288
3．書名 創立30周年記念　比較で照らすギャスケル文学	

１．著者名 西村　美保、大野　龍浩他18名	４．発行年 2018年
２．出版社 大阪教育図書	５．総ページ数 350ページ
３．書名 『「比較」で読み解くギャスケル文学――協会創立30周年記念論集』（仮題）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	濱　奈々恵 (Hama Nanae) (10711278)	福岡大学・公私立大学の部局等・講師 (37111)	
研究分担者	松倉　真理子 (Matsukura Mariko) (90390145)	福岡教育大学・教育学部・准教授 (17101)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関